The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

『十地経』における *adhiṣṭhāna* について
——第八地を中心として——

平　賀　由　美　子

1．はじめに

『十地経』の十地説は佛の自内証の境界から説示されたものであり，その本経の十地説の展開上における機能を考察する際「加持（*adhiṣṭhāna*）」という語はその主題を明らかにする手がかりとなると思われる．

本経の説く「加持（*adhiṣṭhāna*）」の行為主体は十方の仏国土の諸如来たちであり，それらの動因は序章の「世尊なるヴァイローチャナのもつ本願の不可思議な力（加持）（*bhagavato vairocanasya pūrvapraṇidhānādhiṣṭhāna*）」（如来側）と「あなたの（無量阿僧祇劫にわたる菩薩行において獲得した）殊勝なる福徳と智慧（*tava ca puṇyajñānaviśeṣa*）」（菩薩側）とに根拠がおかれ，つまりこの一文は，釈尊がかつての釈迦菩薩であった時に端を発する本の誓願としての加持に基づいて，殊勝なる智慧をもつ菩薩に十方の諸如来たちの加持がなされていると理解される．

諸如来たちの加持が金剛蔵菩薩になされるのは序章と八地以降（八九十地）である．本経は初地から七地まで順次その境界の進展を説いていき，八地以降その境界を「無功用（*anābhoga*），身（身体）・口（言葉）・意（心）の一切の行為活動をしない，自然なる状態」とし，その「無功用（*anābhoga*）」なる八地乃至十地において，前七地までに菩薩によって実現した「智慧を実現する加行の支分（*jñānābhinirhāraprayogāṅga*）」が完成されると説く．また第七地において得た「無生法忍（*anutpattikadharmakṣānti*）」を第八地において具足する．ここでは「無生法忍（*anutpattikadharmakṣānti*）」→「無功用（*anābhoga*）」と把握でき，さらに「無功用（*anābhoga*）」→「加持（*adhiṣṭhāna*）」という構造となっている．

冒頭の第八不動地に入る菩薩の特性として「如来の不可思議な力（加持）がよく加持されて（*svadhiṣṭhitatathāgatādhiṣṭhāna*）いる菩薩」という一文は，菩薩に一切智智を得るよう働きかける「諸如来たちの加持（*tathāgatādhiṣṭhāna*）」がその菩薩に「よく加持された状態（*svadhiṣṭhita*）」であると理解されるが，それは菩薩が無

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

功用（*anābhoga*）なる状態へ至っていることを示している．

そして菩薩は諸仏世尊から更なる境界へ趣くよう教導を受け，無功用なる境界からその菩薩を行為主体とする加持が現される（『十地経論』では自在行と注解）．

ここでは「自己（菩薩）の身体に加持をする（*svakāyam adhitiṣṭhati*）」ことに注目される．その *adhitiṣṭhati* は「菩薩の身体」の上に何かに基づいた働きをすることと考えられ，それは菩薩のもつ「初めに起こした誓願の力（*pūrvapraṇidhānabala*）」に基づくものであり，さらにそれは「本の誓願としての加持（*bhagavato vairocanasya pūrvapraṇidhānādhiṣṭhāna*）」に連続する．何れにしても菩薩が自己の身体の上に「誓願」に基づいた働きを行うことと理解され，それは①決定する，②建立するとの二つの意味において説かれる．①は自己の身体をいかなる状態にするか決心し，それに随って自身を立ちあげ，そして②は「身体の平等性（*kāyasamatā*）」を得て，自己の身体を「十身（衆生身・国土身・業異熟身・声聞身・独覚身・菩薩身・如来身・智身・法身および虚空身）」として自在に設けるとし，ここから衆生済度の多様性が示現される．また第九地，第十地においてもその境界の進展に随って，菩薩の加持はなされるが，その対象を *svakāya* とするのは第八地のみである．

以上の諸問題を念頭に置いて，本経第八地における位置とその地の加持の諸相について検討したい．

2．第八地の無功用性—無生法忍と諸仏世尊の導き—

本経では八地に「無生法忍」を具足し，「無功用」なる状態に至った菩薩が「自在行」へ向かう根拠を諸仏世尊が菩薩に語りかける形式で説かれる．第八地に至った菩薩は初めに起こした誓願の力（*pūrvapraṇidhānabala*）を保つ状態の故，諸仏世尊は如来の智慧を授け給われるとし，以下，要約してその内容を語られる．それらは「諸仏世尊の持つ十力，四無畏，不共仏法の成就はまだ菩薩にはなく，これらの仏法の成就を求めて精励し，努力を起こしなさい（DBhS 136, 2-3)）」とあるように，無生法忍に到達した菩薩にその境地に安住することなく更なる階梯（仏位）へと向かわせる為であり，さらに「衆生の利益の成就と智慧の門の不可思議性（に到達させる）という（あなたの）初めに起こした誓願を憶念せよ（DBhS 136, 6-7)）」とあるように，菩薩の「法忍」に基づく更なる階梯・衆生済度の根底には菩薩のもつ「誓願」が置かれる．

そして諸仏世尊は菩薩に究極なる涅槃及び一切衆生のための行を止めない為に無量無辺の「智慧を実現する門（*jñānābhinirhāramukha*）」を授け，その一刹那に完

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

成した智慧を実現する働きは，初発心から第七地までに到達した時の努力にはるかに及ばないとする．その理由に「先には一つの身による実現によって行が実現されたが，今この地に乗じた菩薩は無量の身の差別によって菩薩行の力が完成される（DBhS 137, 11-13）」と説かれ，即ち前七地までは一つの身体で菩薩行を行っていたのが，八地に至っては様々な身体へ変化させるという「無量の身の差別（*apramāṇakāyavibhakti*）」によって行われ，またそれは「無功用（*anābhoga*）」を示す語である．従ってこの八地では「無量の身の差別」によって，前七地までに実現した加行の支分を完成すると理解される．また『十地経論』の「無量身差別者．一切菩薩身信解如自身故（Br T26, 181b17-18）」とあることに注目され，それは第八地に至った菩薩が何故，自らが行為主体として加持をする対象を *svakāya* としていることにも通じ，これらを考慮しながら第八地に至って初めて現される「菩薩の加持」をみてみたい．

3．自在行―菩薩の加持―

第八地に至った菩薩は巧みなる方便と智慧とを実現し，無功用（*anābhoga*）によって生じる菩薩の慧（*bodhisattva-buddhi*）によって一切智智を観察する時，器世間の様相を観察し（*vicārayati*），了知する（*prajānāti*）．そして三界を観察する智慧を得た時，衆生の身体を差別する智慧に巧みとなり，衆生の生まれるところの場（*upapatti-āyatana*）を実現する覚慧（*buddhi*）を働かせるとし，次の一文が説かれる．

> *sa* yādṛī sattvānām upapattiś ca kāyasamudāgamaś ca tādṛśam eva *svakāyam adhitiṣṭhati* sattvaparipācanāya /（DBhS 140, 1-3）彼は衆生を成熟させるために，諸の衆生たちが生を受けることと身体を得ることと同じように，自己の身体を決定する（*svakāyam adhitiṣṭhati*）

ここでは衆生を正しい方向へ導き，菩薩道へ成熟させることを目的とし，それぞれの生まれの形態に応じて，「自己の身体」を変化させること，即ち誓願の力によって自己の身体をいかなる状態にするか決心し，立ちあげる（*adhitiṣṭhati*）と説く．その‘*adhitiṣṭhati*’は漢訳六訳では「受（Br, Bb, Kj）」→「現（Śn）」→「示現（Śdh）」へと変遷している．

続いて，この菩薩の加持は「一切の身体の分別を離れ（*sarvakāyavikalpavigata*），身体の平等性を得る（*kāyasamatāprāpta*）」こと，更に「衆生身を知り，国土身・業異熟身・声聞身・独覚身・菩薩身・如来身・智身・法身・虚空身を知る」ことをふまえて再度，*svakāyam adhitiṣṭhati* が説かれる．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

sa sattvānāṃ cittāśayābhinirhāram ājñāya yathākālaparipākavinayam atikramād ākāṅkṣaṃ *sattvakāyaṃ svakāyam adhitiṣṭhati*（中略）sa sattvānāṃ cittāśayābhinirhāram ājñāya ākāṅkṣaṃ *svakāyaṃ sattvakāyam adhitiṣṭhati* /（DBhS 141,11－14）彼は諸の衆生たちの心の意楽の実現を悟って，時に応じて成熟し調伏することを見過さないから（それを）願うや否や，衆生身を自己の身体として建立する．（中略）彼は諸の衆生たちの心と意楽の実現を悟って，それを願うや否や，自己の身体を衆生身として建立する．

菩薩は衆生の「菩提への志向性」の実現を知って衆生に対する利他を願うままに，衆生身を自己の身体としてを設け，自己の身体を衆生身として設けるという．同様に，衆生身等の「十身」を自己の身体として設け，また自己の身体を衆生身等の「十身」として設けると説かれる．漢訳六訳は「置（Śdh），作（Śn, Br, Bb, Kj），建立（Dhr）」とあり，訳語にも変化が見られる．「十身」とはあらゆる身体・世界を説示するものであり，ここでは身体の自他平等なる智慧に至った菩薩が「無量の身の差別」をもって *svakāyam adhitiṣṭhati* する．即ち無功用なる無分別智に基づいて「自己の身体」と衆生身等の「十身」との相即性へ達し，「誓願」に基づいた展開がなされていると理解される．これについて『十地経論』は「以衆生身作自身者．彼自在中所作攝取行種種示現（Br T26, 183a26-27）」とされ，即ちこの自在行では菩薩の働きは相対性がなくなり，菩薩行が多様に示現することが知られる．

4．結語

菩薩を行為主体とする加持は第八地の無功用なる境界に至って初めて発現され，それは菩薩の保持する「誓願」に基づいてなされる．その「誓願」は諸如来たちの加持に連続するものでもあり，「本の誓願」にも連なるものと理解される．その第八地の菩薩が行う加持とは，「自己の身体（*svakāya*）」とあらゆる身体・世界との相即性において，「無量の身の差別」をもって，多種多様に身体・世界を示現する菩薩行であるといえる．

〈キーワード〉 *svakāya*, *pūrvapraṇidhāna*, *tathāgatādhiṣṭhāna*

（高野山大学密教文化研究所受託研究員）

NII-Electronic Library Service